県指定文化財 穴堰を調査せよ！

県指定文化財「穴堰」とは

登山の難易度が高いことで知られ、日本百名山のひとつである「飯豊山」。その山頂に向かう途中に築造２００年以上の歴史的な農業用水利施設がある。

江戸時代、慢性的な水不足に悩む米沢藩は、白川に流れる水量を増やすため、飯豊山の標高１５００ｍ地点にトンネルを造ることを計画した。寛政 11 年（１７９９年）に着工された工事は、花こう岩の堅硬な岩盤をつるはし等を用いて人力のみで掘り貫いて進められたため、工事は難航し、19 年の歳月をかけて全長約１５０ｍのトンネルが完成した。

このトンネルは「飯豊山の穴堰」と呼ばれ、取水口と吐出口の両方向から同時に掘り進めた工事は貫通地点で高さ約 2.4 ｍの段差となり、精密な測量技術の無いこの時代において高い技術力がうかがえる。

この歴史的な価値が評価され、昭和 31 年には県の史跡に指定されている。

しかし、昭和 42 年の羽越水害により通水が不能となり、昭和 55 年には白川ダムが完成したこともあり、その役目を終えている。

今回、その歴史的な価値を財産として継承していくため県・町・土地改良区の関係者による調査隊を結成し、施設の状況確認を行った。

穴堰の現地調査について

飯豊山の登山口の大日杉小屋から穴堰までは標高差約９００ｍ、距離にして約8.5ｋｍ、往復約 12 時間の行程だ。この道のりの険しさとコロナ禍の影響で調査隊を結成することが困難であったため、正式な調査としては平成 29 年以来６年振りとなった。

今回の調査では、過去の文献等と比較できるように穴堰の施設等の現在の状況について確認を行った。

調査の結果、穴堰の取水口は、約 40 年前から堆砂が進み、現在は施設の約半分が土に埋まっていることが分かった。

施設本体については、顕著な老朽化は見られず、約２００年経過した現在も原形を留めており、当時の高い技術力がうかがえた。

穴堰までの険しい登山道（ザンゲ坂）

調査隊員へインタビュー

白川土地改良区
手塚　情係長

白川管内に水を引くために先人が造成した歴史的価値のある穴堰があることは知っていましたが、今回初めて穴堰まで登ってみました。往復 12 時間の登山はやはり過酷なものであり、造成時の労力と技術力は計り知れないと感じました。

今後も定期的に現地確認するなど穴堰を引き続き見守っていきたいです。

穴堰調査隊集合写真　（R5.8.28）